

異世界でカフェを開店しました。

13

登場人物
紹介



▲
バジル

緑の精霊。
リサの料理が大好きで
よく味見している。

好きな食べ物：卵焼き



▲
ハウル

リサの教え子。
学院の料理科を卒業し、
夢だった王宮の厨房に
就職したのだけれど……？

好きな食べ物：パイ

くわりさ
▲
リサ(黒川理沙)

料理好きの元OL。
カフェの店長をしつつ
学院で料理を教えている。
出産を控えているため
仕事は一時お休み中。

好きな食べ物：和食

▼
ヴェルノ

オリヴィアの息子。
無邪気な性格で
キースを慕っている。

好きな食べ物：
焼きそば



▲
キース

王宮の元副料理長。
リサやジークと同じく
料理科で講師をしている。

好きな食べ物：から揚げ



▲
オリヴィア

カフェの接客担当。
夫を亡くして以来、
一人で子育てしてきた。

好きな食べ物：肉じゃが



▲
ジーク

リサの夫で
カフェの副店長。
妊娠中もアクティブな
リサを心配している。

好きな食べ物：プリン



▲
アナスタシア

リサの養母。
人気ブランドの
デザイナーでもある。

好きな食べ物：
カルボナーラ



▲
ギルフォード

リサの養父。
王宮の魔術師長で
精霊を見ることが出来る。

好きな食べ物：シチュー

目次

異世界でカフェを開店しました。	13	7
ある料理人の愛情	233	
ある精霊の守護	267	

異世界でカフェを開店しました。

13

プロローグ

鍋の中身がぐつぐつ煮え、フライパンからはジュージューと焼ける音がする。包丁がリズムよく奏でる音に合いの手を入れるかのように、ボウルの中で泡立て器がテンポよく音を刻む。

そんな中――

「こっちもやってくれ！」

「おい、これどうなってんだ！」

怒鳴り声にも近い、男たちの声が飛び交う。

ここは王宮にある厨房。食事の数時間前からはじまる調理は、佳境を迎えていた。王宮に関わる人間すべての食事を作っているため、その数は百食以上。

大きな会議や催しがある時は、その数倍を用意しなければならぬこともざらだ。

そんな厨房の中を、真新しいコック服に身を包んだ青年が足早に移動する。

彼はハウル・シユスト。

この秋から王宮の厨房で働きはじめた新米料理人だ。

「ハウル、こっち手伝ってくれ！」

「はい！」

前菜の下ごしらえが終わり、それを担当者に届けたところで、今度はスープの担当者から声をかけられる。まだ新人のハウルはそうやって、いろんな部門の間を歩き来していた。

やがて嵐のような時間が過ぎ去り、料理人たちは次の調理がはじまるまでの間、休憩を取る。

厨房から料理人たちが出ていく中、ハウルだけが一人残っていた。

「はあ……」

ハウルは深い深いため息を吐く。

このため息は疲労のせいもあるが、それだけが理由じゃない。

さっきまで賑やかにいろんな音が響いていた厨房は、しんとしている。

「はあ……」

もう一度こぼれたハウルのため息が、広い厨房の中にとても大きく響いた。

第一章 お腹が大きくなりました。

「よいしょ」

椅子から立ち上がる拍子に漏れた言葉に、彼女はハッとした。最近、動く時について『よいしょ』と言ってしまっ。

その理由である大きなお腹を、彼女は自然と手で撫でた。

ここフェリフォミア王国では珍しい黒髪を持つ彼女の名前は、リサ・クロカワ・クロード。

元々この世界の住人ではなく、異世界からやってきた。しかし、現在は王都にある人気店カフェ・おむすびのオーナー兼店長であり、フェリフォミア国立総合魔術学院に設立された料理科の主任講師でもあった。

ただ、それらの仕事は一時的にお休みしている。

なぜならリサのお腹には新たな命が宿っているからだ。

最近、お腹はさらに大きく、そして重くなってきた。そのため、先程のようなかけ声を自然と出してしまう。

「リサ、そろそろ行ってくる」

部屋の外から顔を出した男性が、そう声をかけてきた。

銀髪に青い瞳の、容姿が整った彼はジーク・ブラウン・クロード。リサの夫であり、今は彼女に代わってカフェ・おむすびの臨時店長をしている。

「玄関までお見送りするね」

彼を見送るために、リサは大きいお腹を気遣いながら立ち上がったのだ。

「外は寒いからここでもいいよ」

「大丈夫！ さっきメリルにストール出してもらったから！」

ほらと言って、リサは持っていた大判のストールを体に巻きつける。これは先程、リサ付きのメイドであるメリルが用意してくれたものだ。

ここ数日は一段と寒くなった。冬本番に向けて、冷たい風が吹きはじめています。

「それに家の中でくらい運動しないと」

カフェと料理科の仕事をお休みしている今は、きっかけがなければ体を動かすことがない。玄関まではそう遠い距離ではないけれど、せめてそれくらいは歩きたいと思っていた。

「わかったよ」

ジークはやれやれと言わんばかりだが、エスコートしてくれるのだろう。リサに手を差し出して

くれた。

手を重ねると、彼の体温が伝わってくる。骨張っていて大きな彼の手にすっぽりと包まれた。そのまま手を引かれ、リサは玄関へ移動する。

玄関ホールにやっていると、ジークはドアを背にしてリサに向き直った。

「それじゃあ、行ってくる」

「うん、いつてらっしゃい。カフェのことよろしくね」

お腹を^{いた}らわつ、軽くハグをする。ジークから頬にキスをされ、リサも同じようにした。

出る間際、「温かくするんだぞ」と言い残していったジークに小さく笑いながら、リサは手を振って彼を送り出した。

「リサ様、体が冷えますのでお早く」

メイドのメリルに呼びかけられて、リサは玄関ホールから部屋に戻る。後ろからついてくるのは、玄関の外までジークを見送っていたヴァレットのクライヴだ。

「リサ様、本日はアナスタシア様と本館で過ごされるとお聞きしていますが……」

「そうそう。シアさんが相談したいことがあるって言ってたけど……」

——生まれてくる子供の服のことかな……？

アナスタシアはリサの養母であり、シリルメリーという女性に大人気の服飾ブランドのオーナー

兼デザイナーだ。

リサの妊娠がわかってからというもの、アナスタシアは初孫の誕生を待ち望んでいる。だから相談したいことがあると言われて、真つ先に『また赤ちゃんの服のことか』とリサは思ったのだ。

そうリサが思うのも無理はない。何しろアナスタシアは気が早いことに、すでにたくさんの服を作ってくれている。それこそ赤ちゃんが着尽くせないくらいに……

しかも、まだ性別がわからないからといって、男女両方の服を作っている。どちらの性別でも使えるようなデザインのものもあるとはいえ、それはごくごく一部だ。

リサもたびたび『もういいから』と言っているのだが、シリルメリーでも売り出したいと言われ、強く止められないでいた。

リサとジークが生活している別館から、渡り廊下を通じてクロード邸の本館へ向かう。ジークと結婚するまではリサも本館に住んでいたため、勝手知ったる建物だ。

メリルからアナスタシアはサンルームにしていると聞いていたので、リサもそこへ向かう。お茶会でも使われているクロード家のサンルームは、屋敷の中で一番陽当たりのいい場所にある。

天気がいい日は陽が差し込んで部屋が暖かくなるため、今のような冬の時期でも快適に過ごせるのだ。

部屋の前に到着するとメリルが扉をノックする。部屋の中から「どうぞ」という返事があったので、リサは入室した。

「リサちゃん、いらつしやい」

ソファでくつろいでいたのは、ゆるりとしたウェーブのかかるピンク色の髪を持つ女性だ。彼女がアナスタシアである。

「お待ちせしました、シアさん」

アナスタシアとは先程、朝食の席でも顔を合わせていた。

「さあ、こっちにどうぞ」

アナスタシアはリサを手招きして、自分が座るソファの隣へ誘う。

リサは促されるまま、彼女の隣に腰を下ろした。

「日に日に大きくなるわねえ」

座ると余計に目立つお腹に視線を落として、アナスタシアは表情を緩ませる。

「胎動も結構激しくなってきたんですよ」

「まあ！ 触らせてもらってもいいかしら？」

「もちろんですよ！」

リサが快諾すると、アナスタシアはワクワクした顔でリサのお腹に手を当てた。

「赤ちゃん、お祖母様ですよ」

優しく呼びかけるリサの声に、一瞬、間を置いてからポコンとお腹が動いた。

「わっ！ 今ハッキリと感じたわ……！」

アナスタシアは興奮したように頬を染めた。そして、もう一度リサのお腹に手を当て直すと、今度は自ら話しかける。

「赤ちゃん、お祖母様ですよー！」

また少し間を置いてから、ポコンと反応があった。

「うふふ、もう言葉がわかるのかしら？」

楽しげに微笑んだアナスタシアは、感触があった箇所を撫でる。

「声は伝わっていると思いますよ」

「そうだといいわねえ。それにしても、私、お祖母ちゃんになるのね」

「……あ、嫌でした……？」

違う呼び方の方がよかつただろうか、とリサはハツとしてアナスタシアの顔を窺った。

「ああっ、違うの！ むしろ嬉しいのよー！ 実際に赤ちゃんからそう呼ばれるのはまだ先でしょうけれど、初めて自分がお祖母様って呼ばれて、赤ちゃんがそれに応えてくれたから実感が湧いてきたの」

「そうだったんですね……それならよかったです」

「ふふ、お祖母様ばあって早く呼ばれたいわ」

そう言っただけでアナスタシアはとて嬉しそうに笑う。それを見てリサもホッとした。

大きな窓から差し込む冬の日差しがぽかぽかと気持ちいい。

そんな中、リサとアナスタシアは、お腹の子供の存在を確かに感じながら、微笑み合うのだった。

第二章 経験者の話はためになります。

「そうそう、リサちゃんに相談があるのよ！」

アナスタシアが何かを思い出したように、そう切り出した。

「あのね、リサちゃん。ステイルベンルテアをやらない？」

「ステイルベンルテア？」

リサは初めて聞く言葉に首を傾げる。そのリサの反応を見て、アナスタシアが説明をはじめた。

「ステイルベンルテアっていうのはね、赤ちゃんが無事に生まれてくるように、って願いを込めて開くパーティーのことよ。お母さんになる女性を勇気づけるためでもあるから、友達や親しい人を

集めてお祝いするの。でも妊婦さんにお酒はよくないから、お茶を振る舞うのよ」

「そんな行事があるんですね」

リサが元いた世界ではベビーシャワーと呼ばれるものだ。といっても日本ではそこまでメジャーなイベントではなかったため、リサはあまりピンと来ていない。でも、話を聞いて楽しそうだなと思った。

「基本的に妊娠中の女性が主催するんだけど、一人じゃ大変だから家族や友人が協力するのよ。もしよかったらリサちゃんのステイルベンルテアは私が協力したいと思ってるんだけど……」

「もちろんです！　というか、私はステイルベンルテアを知らないの、すごく頼っちゃうと思うんですが……」

「全然！　むしろ頼ってほしいわ！　……そうは言っても、私は自分のステイルベンルテアを開いたことがないから、人に招待された経験を元にやるしかないんだけどね」

そう言っただけでアナスタシアは苦笑する。

アナスタシアと夫であるギルフォードの間には実の子供がいない。だからアナスタシアは自身のステイルベンルテアを開いた経験がないのだ。

そのせいもあって、リサのステイルベンルテアに協力したいのかもしれないし、それなら自分だけでなくアナスタシアにも楽しんでほしいとリサは思った。



「うん、やりましょう、シアさん！ スティルベンルテア!!」
「ええ、楽しい会にしましょう!」
リサとアナスタシアは、手を取り合って頷いた。

「スティルベンルテアにはいろいろな形があるのよ」
アナスタシアはスティルベンルテアについての知識がまったくないリサに説明をはじめた。
「まずはテーマね。どういう会にするか、きちんと決めておくのが成功の秘訣だと聞いたわ」
「テーマ、ですか……?」

「たとえば、誰を招待するかによってテーマが変わってくるわ。友達だけなのか、親族も呼ぶのか、はたまた仕事の関係者まで広げるのか。規模も雰囲気も十人十色なのよ」
リサがイメージしたのは、本当に親しい人だけを呼んでする気楽なパーティーだったが、それだけじゃないようだ。

「女性だけを呼ぶ会もあるし、子供も参加可能にしたり、逆に大人だけに限定したり、主催する人によるわね」

「すごく自由なんですわね」

「そうねえ。でもあくまで主役は妊婦さんとお腹の赤ちゃんよ。主役の妊婦さん自身がどういう会

にしたいか、ってというのが重要なの」

「なるほど」

アナスタシアの言葉を聞いて、リサは少し考える。

——私なら、親しい人たちを呼んで、日頃のお礼を伝える会にしたいかなあ。今もカフェ・おむすびや料理科を支えてくれる人たちのおかげで、こうして休んでいられるわけだし……

リサがカフェや料理科で担^{にな}っていた役割はとても大きかった。

だからリサの妊娠がわかってからというもの、主に夫であるジークの働きかけで、リサがいなくても仕事が回るような態勢を作っていた。

幸い、料理科は年を重ねることに講師の数が増え、リサが直接教えなくても大丈夫な環境になりつつあったし、カフェ・おむすびの方も王宮の厨房（ちやうぼう）からの出向期間を延長したヘクターと、新しくメンバーになった料理科の卒業生・ルトヴィアスが頑張ってくれている。

もしこれが、数年前——リサがこの世界に來たばかりの頃や、カフェや料理科ができたばかりの頃であれば、不可能^だだったはずだ。

当時、フェリフォミアの食文化はまだ発達していなかった。リサにしか作れない料理がたくさんあり、その役目を誰も代わることができなかっただろう。

それから数年。

カフェ・おむすびや王宮、料理科などでリサが努力し、周りの人たちが協力し続けてくれたおかげで、リサの代わりを務められる料理人が何人も育っている。

リサは彼らに成長するきっかけを与えたかもしれないが、成長したのは彼ら自身の努力の結果だ。そんな彼らをはじめ、これまで関わった人々に感謝の気持ちを伝えたいとリサは思っていた。

豪華でかしまった会にするよりも、温かくもてなせたら嬉しい。そのことをアナスタシアに伝えると、「リサちゃんらしいわね」と笑顔で賛成してくれた。

「じゃあ、招待する人たちはそれぞれお仕事もあると思うから、早めに招待状を送りましょう」

「そうですね。皆さん、スケジュールの調整が必要だと思いますし」

リサとアナスタシアは相談し、スタイルベルテアをひと月半後に開くことに決めた。

その日の夜。

「スタイルベルテア？」

「そう。シアさんから開いてみたらって提案されてね。楽しそうだって」

カフェから帰ってきたジークに、リサは今日決めたことを話す。そしてソファに座ったままジークにたずねた。

「ちなみにジークは参加したことある？」

「確かライラが生まれる前に、母さんが開いてたな」

ライラというのはジークの妹だ。といっても歳が離れているため、ライラの生まれる前に母親が開いたスタイルベンルテアのことを、ジークは覚えていたようだ。

「その時のスタイルベンルテアはどんな感じだったの？」

「詳しくは覚えてないけど、割と小ぢんまりとした感じだったと思う。自宅にごく身近な人だけを呼んで開いたはずだ。ライラは三人目の子供だったというのもあって、そんなに大きな会にはしなかったのかもな」

「なるほど……」

「身近なメンバーだけを呼んで、気張らずにやるのが一番じゃないか？ 妊娠中なんだから準備も大変だし、頑張りすぎるのは体によくないぞ」

そう言いながらソファの隣に座ると、ジークはそっとリサのお腹に手を当てた。

前から何かとリサのお腹を触ることが多かったが、最近はその頻度ひんどがさらに高くなった気がする。日に日に大きくなっていくお腹。胎動たいどうも頻繁ひんぱんにあり、それを感じることでジークも父親になる心構えをしているのだろう。

ただ、無言でじっと手を当てるのはどうかとリサは苦笑する。せつかくなら何か話しかければいいのに……

—— 心の中で会話してるのかな？

「今触っているのは、あなたのお父さんですよ」

代わりにリサが話しかけてあげると、その瞬間、お腹の赤ちゃんが動いた。

「……おお」

ジークの手にもその感触が伝わったのだろう。彼は小さく声を上げた。

チラリと彼を見れば、とても嬉しそうにしている。無表情だけれど少しだけ口角が上がリ、雰囲気きふいが柔らかくなるのだ。

そんなジークをじっと見つめていたら、リサの視線に気付いたのか彼が顔を上げた。少しばつ悪あくそうな表情になったので、リサはクスリと笑う。

「ジークも何か話しかけてよ。その方が赤ちゃんも嬉しいはずだし」

「ああ……」

どうやら話しかけるのは照れくさいらしい。何度か同じことを言っているが、一向に話しかける様子はなく、リサはその度にやれやれと思うのだ。

ただ、リサは知らない。

彼女が寝ている間、ジークがお腹の赤ちゃんに向かって話しかけていることを……
「それで、スタイルベンルテアはどうするんだ？」

ジークはリサのお腹から手を離すと、話題を元に戻した。

「ひと月半後にやることだけは決まったけど、どういう内容にするかはまだ考え中。そもそもステイルベンルテアのことを知ったのが今日だし、経験者の話を聞いてから決めたいかな」

「カフェのメンバーの中で経験者といえば、オリヴィアとデリアか？」

オリヴィアとデリアはカフェ・おむすびの従業員で、接客を担当している。二人とも子供がいるため、そういう意味ではリサの先輩である。

おそらくステイルベンルテアの経験もあると思うので、彼女たちにまず話を聞きたいとリサは考えていた。

「そうだね。明日カフェはお休みだけど、二人は出勤する？」

明日はカフェの休業日。従業員はレシピの試作をしたり、備品の補充をしたりと、営業日には手が回らないことをするのだ。

ただ、オリヴィアとデリアは子供がいるし、調理スタッフに比べて休業日にやるべき仕事は少ない。だから、休んで家族サービスに務めてもらうこともあるのだ。

ここ最近の勤務体制についてはジークに一任しているので、明日の二人の予定も知っているだろう。

「ああ、昼過ぎに来るって言うってたぞ」

「じゃあ、そのくらいに私も行こうかな。二人に会いたいし」

最近は家にばかりいて人に会わないので、リサは退屈していた。気分転換も兼ねて外に出るのもいいだろう。

デリアとオリヴィアに会って、久しぶりにおしゃべりしたい。友人としてもそうだし、先輩ママである二人と話をするのは、リサにとっても有意義なことだ。

「わかった。二人にも一応伝えておきな」

「うん！ お願いね！」

翌日、リサはオリヴィアとデリアが出勤してくるタイミングに合わせて、ゆっくりカフェに向かった。

店の前で馬車を停めてもらうと、転ばないよう気を付けて降りる。そしてカーテンが閉まり、休業日を示す札が下がっているカフェのドアを開けた。

「お疲れ様です」

リサがそう言うって店内に入ると、カウンターを挟むようにして立っていたオリヴィアとデリアがこちらを向いた。

「まあ、リサさん！」

ミルクティー色の長い髪をサイドテールにした女性がオリヴィアである。

「いらっしやい……って言うのも何か変ね」

そう言っておかしそうに笑うのはデリア。肩までのこげ茶の髪をハーフアップにしている。

「言いたくなるのはわかるよ。カフェに来るのも久しぶりだからね」

「ほらリサさん座って。お腹が大きくなってきたわね」

カウンターの外にいたオリヴィアが、リサをテーブル席に誘導する。リサはありがたく座らせてもらった。

「リサさん、ちゃんと休めてる？ 大丈夫？」

お水を持ってきてくれたデリアが心配そうに聞いてくる。

「ものすごくのんびりしてるよ。こんなに暇でいいのかってくらい」

「これまでが忙しすぎたのよ。ゆっくりできるのも赤ちゃんが生まれるまでだけだね」

オリヴィアはかつてのことを思い出しているのだろう。ちょっと困ったように、でも懐かしそうに笑った。

「そうねえ、子供が生まれたら一日一日があつという間だから」

デリアもうんうんと頷きながら同意する。

「そっか、それもそうだよね……」

経験者の言葉にリサはしみじみと^{つぶや}呟く。赤ちゃんが生まれたら、そのお世話でこれまで以上に大変になるだろう。

自分の仕事を周りのみんなに肩代わりしてもらっている。そういう申し訳ない気持ちが大きかったのだが、赤ちゃんが生まれてからのことを考えると、今だけのんびりさせてもらうのも悪いことではないような気がした。

「ジークくんから少しだけ聞いたけど、ステイルベンルテアのことを知りたいんですって？」

オリヴィアの言葉で、リサは今日カフェに来た目的を思い出す。

「そうなの。実はステイルベンルテアを開くことになったんだけど、私自身ステイルベンルテアに参加したことがないから、どんな感じかまず知りたくて。二人はどういう風にした？」

「ステイルベンルテアね。懐かしいわ。私も一応開いたけど、特別なことはしなかったわ。親しい人を招いたお食事会みたいな感じね」

デリアは懐かしそうに微笑みながら言った。

「うちは旦那の方が張り切っちゃってたわね。いつも仕事でいろんなところに行って忙しい人だったから、そういう機会がなかなか持てなかったせいかしら。私の友人だけじゃなく、旦那の友人もたくさん呼んだわ。結婚した時のパーティーとほとんど同じ顔ぶれだったけれど」

オリヴィアも懐かしそうな表情をする。ただ少しだけ寂しげにも見えた。

彼女の夫は数年前に亡くなっている。楽しかった思い出は嬉しくもあり、切なくもあるのだろう。「やっぱり人によってそれぞれなんだね〜」

「そうねえ。スタイルベンルテアは生まれてくる赤ちゃんも、そのお母さんのために開くものだから、主役が望むような形にするのが一般的ね」

「一人目の時には盛大に開くけど、二人目、三人目になるにつれて簡素になっていく傾向もあるわ。そもそも必ず開かなければならないものでもないし、本当に人それぞれよ」

オリヴィアとデリアの言葉にリサはなるほどと頷いた。二人の話を聞く限り、スタイルベンルテアはとても自由度の高いイベントのようだ。

イベントの本質である『生まれてくる赤ちゃんとお母さんのための会』ということさえ守っていれば、あとは人それぞれの楽しみ方でいいのだと思う。

だが形式が決まっていないものだからこそ、逆にどうしようか悩む。

「うーん……どうしよう。ますますわからなくなってきた……」

頭を抱えるリサを、他の二人は微笑まじげに見ていた。

「そんなに深刻になることはないわよ。リサさんの気持ちが一番大事なんだから」

「そうそう。無理して開くものでもないし、割り切って『自分が思いつきり楽しめる会にするぞ』って人も多いのよ」

オリヴィアもデリアも悩むリサを励ましてくれる。

招待客をもてなしたければもてなせばいいし、自分が楽しみたいならそのための会にすればいいと言う。

「準備が大変なら私たちも手伝うし、遠慮なく言って！」

デリアの言葉にオリヴィアも頷いてみせる。

「二人ともありがとう。よければ、また相談に乗ってほしいな」

「任せてちょうだい！」

オリヴィアから心強い返事をもらい、リサは心が軽くなった。

その後、リサは恒例の試食を兼ねた昼食に同席させてもらい、楽しい時間を過ごした。久々にカフェを訪れたことがとてもいい気分転換になったし、オリヴィアとデリアからスタイルベンルテアのことともいろいろ聞くことができて、充実の一日だった。

しかし、それが後にリサを悩ませることになるとは、この時はまったく考えていなかったのがある。

第三章 方向性について悩んでいます。

スタイルベンルテアに向けて、リサはまず招待する人たちのリストを作っていた。ゲストの人数が決まれば、おおよその規模感もわかると思ったからだ。

「まずカフェのメンバーに、料理科の先生たち、友達のアンジェリカにセラファイナ。あとアシユリー商会の人たちも呼びたいなあ」

日頃からお世話になっている人は、できるだけ多く招待したい。

料理人という職業柄か、リサはせっかく招待するなら、きちんともてなしたいと思っていた。スタイルベンルテアは赤ちゃんと妊婦さんのためのものだというのが、もてなすことに喜びを感じるタイプのリサにとっては、それ自体も楽しみなのだ。

招待する人の名前をあらかじめ書き出したところで、思わず声を漏らした。

「うわ、結構な人数だなあ……」

リサとしてはアットホームな会にしたいと思っていたのに、この人数だと結構な規模になってしまいそうだ。

「人数を減らすか……でもなあ……」

リストアップした人たちは、いずれもお世話になっている人ばかり。招待する・しないに分けるとなると、その線引きが難しい。

「いつそ女性に限定しちゃう？ けどそれもなあ……」

スタイルベンルテアを開く人の中には、女性だけを呼ぶ人もいるらしい。話を聞いたところ、デリアはそのタイプだったようだ。

他に、カップル限定で呼ぶこともあるという。これはお茶会やパーティーでもよくあることなので、それに則ったタイプのスタイルベンルテアらしい。

またオリヴィアのように、自分の友人だけではなく、夫の友人も呼ぶタイプもいる。

赤ちゃんが生まれるとなると、夫側にもまた覚悟がある。スタイルベンルテアは経験者から話を聞けるチャンスでもあるので、これを機に父親になる心構えをしておきたいという人も少なくないようだ。

——誰を招待するかを考えるより先に、どんな会にするかを具体的に決めた方がよかつたかなあ……？

リサは招待客のリストを前にして、一人悩みはじめた。

オリヴィアとデリアの話聞いて、いろいろなタイプのスタイルベンルテアがあることを知り、

リサはワクワクしていた。

仕事を離れて家にいる生活は、お腹の子のためとはいえ少し退屈だ。クロード家の面々とは毎日顔を合わせるものの、カフェのメンバーやお客さん、料理科の講師や生徒たちにはほとんど会えていない。

これまでカフェや料理科で働いて、毎日いろんな人に会えた。

それが最近はずっとなくなってしまったので、正直なところ、リサは寂しかった。だからステイルベンルテアで久しぶりにたくさんの人に会えると思うと嬉しかったのだ。

その結果、招待客のリストが膨大になってしまい、気が付けば結婚式の時と同じくらいの人数になっっている。

和気藹々とした会にしたいなと漠然と思っていたのだけれど、これだけの人数を呼んだらどんな会になるのか想像もつかない。

かといって今リストアップした人を減らすのは嫌だなあとも思う。

「あの、リサ様」

「ん？ どうしたの、メリル」

メイドのメリルの呼びかけに、リサはペンを持ったまま振り返る。

「アナスタシア様がいらしているのですが、お通ししてよろしいですか？」

「シアさんが？」

別館に来るのは珍しい。とはいえ特に不都合もないので、通してもらおうようメリルに伝える。

「急に来てしまつてごめんなさいね。お邪魔じゃなかった？」

「大丈夫ですよ。ステイルベンルテアのことを考えてただけなので」

リサの様子を窺いながら入室してきたアナスタシアに、リサは向かい側のソファを勧める。すぐにメリルがお茶とお菓子を出してくれた。

「ステイルベンルテアのことを考えていたなら、ちょうどよかつたわ！ 私も友人にいろいろとね、聞いてみたの」

「どうやらアナスタシアの方も情報収集をしてくれていたらしい。」

「私のお友達はたくさんゲストを呼んで大規模にやったという人が多かつたわ。結婚してからも仕事を続けている人がほとんどだし、そういうイベントはめつたにないからなのか、普段会えない人を呼ぶことも多いみたい」

なるほど、とリサは頷いた。

リサとジークは結婚して一年半が経つし、このくらいの時期に妊娠や出産をするのはならおかしくないことではない。

ただ、フェリフォミアの人々の結婚は早い。何しろ成人年齢が十六歳。男女ともその歳になれば

結婚できてしまうのだ。

それぞれの仕事に馴染んだり、生活の基盤を整えたりするため、相手がいても二十歳前後までは婚姻期間とする人が多い。だが、それでもリサの世界の結婚適齢期より早いことは確かだ。

加えて、こちらの世界は元いた世界より女性の社会進出が目覚ましい。なので、結婚してもすぐ子供を作るといふ人は多くないようだ。

もちろんすぐ子供を授かる夫婦もいる。ただ、その場合、女性側は仕事の量を調整したり、子供が生まれたら預ける場所が必要になったりするので、いろいろと大変らしい。

子供を預かってくれる機関や民間のベビーシッターも多いので、なんとかなるようではあるけれど、子供を作るなら計画的にという人が多数派だと聞いている。

きつとアナスタシアの友人たちも結婚してからステイルベンルテアを開くまでの間に、そこそこ時間が経っていたのだと思う。だからこそ結婚式以来、会えていなかった人たちをステイルベンルテアに呼んだのではないだろうか。

「あら？ もしかしてリサちゃん、招待する人のリストを作っていたの？」

アナスタシアはテーブルの上に置かれた招待客のリストに気付いたらしい。

「先に呼びたい人をピックアップすれば、だいたいの規模感がイメージできるかなって思ったんですけど……」

「それはいい考えね！ ……あの、リサちゃん。私も呼びたい人が何人かいるんだけどいいかしら？ せっかく孫が生まれるから一緒にお祝いしたいの」

アナスタシアはリサの表情を窺いつつも、期待するような目を向けてくる。

オリヴィアは自身の友人だけじゃなく、夫の友人も呼んだと言っていた。それなら養母であるアナスタシアの知り合いを呼んでもおかしくはないだろう。

それにアナスタシアは自分の子供のステイルベンルテアができなかったから、せめて孫の時は友人たちに祝ってほしいという気持ちがあるのかもしれないと、リサは思った。

「もちろんです！」

リサが快諾すると、アナスタシアはホッとしたように表情を緩ませた。

さっそくアナスタシアから招待したい人たちの名前を聞く。ほとんどはアナスタシアがお茶会を開く時に招いている人たちだったので、リサとも顔見知りだ。

そのことに少し安堵しながら、リサは新たな人たちをリストに加えていった。

「リサちゃん、僕の友人も呼んでいいかい？」

アナスタシアの友達を招待すると知って、養父のギルフォードもそう言ってきた。アナスタシアの友人はよくてギルフォードの友人はダメだとは言えないので、リサはもちろん頷く。

ただ、ギルフォードの友人はアナスタシアの友人ほどリサにとつて馴染みがない。その上、ギルフォードの友人は国の要職に就いている人が多く、本当にスティルベルテアに来られるんだろうか？　と思ってしまうほど忙しい人ばかりだ。

ひとまずリストに加えてみたはいいものの、気付けば結婚式の時と同じくらいの人数になつてしまつていた。

「どうしよう、これ……」

本館で夕食を取ったあと別館の自室に戻ってきて、リサは頭を抱える。

ちよつとしたお茶会くらいの規模にするつもりだった。格式張らず、気軽に来てもらえるような会をリサは想像していたのだ。

だが、この人数になると大規模にせざるを得ないだろう。

リサは知らなかったが、実はアナスタシアが今日スティルベルテアの話聞きに行つてきたという相手は、このフェリフォミア王国の王妃であるアデリシアだった。

アデリシアのスティルベルテアは、当然ながら王太子であるエドガーがお腹にいた時のこと。次代の王のスティルベルテアともなれば、それは盛大なものだったはずだ。

また、ギルフォードもスティルベルテアは盛大にやるのが当然という認識である。何しろギルフォードは由緒正しき侯爵家の生まれだ。家柄を考えると、スティルベルテアもそれなりに立派

なものを開かなければならないし、それが一般的だと思つている。

リサが考えていたアットホームで気軽な会と、貴族としての家格に見合うスティルベルテアは、明らかに違う。

とはいえ、リサもクロード侯爵家の一員である。

カフェの店長や料理科の講師として普通に働いてきたので、リサ自身あまり意識していないが、クロード家は立派な貴族なのだ。

フェリフォミア王国は実力主義なので、貴族であろうと平民であろうと実力があれば評価されるし、貴族が偉いとか貴族だから何をやっても許されるなんて風潮もない。

しかし、貴族であるというのも実力のうちだ。爵位があるということは、その分、国に貢献しているということになる。

もちろん世襲される爵位もあるが、貴族は国に多額の納税を課されている上に、責任も重い。経済を回し、人を導く。それがフェリフォミア王国の貴族なのだ。

リサのスティルベルテアも、そういう事情を考慮したものでなければならぬ。

まだそこまで明確な考えには至つていないものの、うつすらとそれに近いことを考えて、リサはますます悩んでいた。

うんうん唸りながらリストとにらめっこしていたら、部屋のドアがノックされた。

返事をする、ドアから顔を出したのはジークだった。

「リサ、寝ないのか？」

寝室にこないリサを心配して、様子を見に来てくれたらしい。

「うん、今行く……」

寝支度は済んでいるが、ステイルベンルテアのことを考えはじめたら止まらなくなったのだ。

リストを裏返しにして机に置くと、リサはゆっくり立ち上がる。

そしてドアを押さえて待っているジークのもとへ向かった。

「うーん……」

あれから数日経つが、リサの中でステイルベンルテアの計画は全然まとまらずにいた。

今のままだと、具体的にやりたいことも決まっていなのに、招待する人の数だけ多い会になっ
てしまいうさだ。

たかさんの人に会いたいという気持ちはもちろんある。でも、リサが会いたい人たちに加えて、
アナスタシアとギルフォードの友人たちも招待リストに加わった。

それによって、さらに人数は多くなってしまうわけ……

リサにはステイルベンルテアに参加した経験がないので、ステイルベンルテアがどんなものかは

想像するしかない。今は経験者からの話を聞いて、それを補完しているが、こんなに人を呼んで大
丈夫なのかな？ と迷ってしまった。いた。

「リサ様……？ お医者様が見えましたが、お通ししてよろしいですか？」

応接室で待機していたリサに、メリルがそつと声をかけてくる。寝椅子に座って考え込んでいた
リサは、それにハツとして顔を上げた。

今日はこれから医師の検診なのだ。

「うん、大丈夫。お通しして」

リサが頷くと、メリルが一度部屋の外に出ていく。再びやってきたメリルは、老年の女性を伴っ
ていた。

「こんにちは、リサさん」

「こんにちは、先生」

顔の皺を深くして微笑む医師に、リサもつられるように笑みを浮かべる。

妊娠初期からお世話になっている専門の医師だ。ややふくよかな体に、柔らかな表情。性格もお
おらかで明るいこの医師のことを、リサはすぐに好きになった。

クロード家のお抱え医師の奥さんでもあるので、家族からの信頼も厚い。

おっとりとしつつも頼もしい彼女の前では、リラククスして診察を受けることができている。

「さてさて、赤ちゃんの様子はどうですか？」

医師の言葉を聞いてリサは寝椅子に横になる。メリルに手伝ってもらいながら、診察用の服の前をくつろげ、大きくなったお腹を出した。

この服はアナスタシアが作ってくれたものだ。上下に分かれていて、それぞれ前のボタンを開けられるようになってる。

これには医師も診察がしやすいと喜んでくれた。

「では触りますよ」

「はい」

力の抜けた緩い話し方をする医師に、リサはクスリと笑って返事をする。

優しく、でもしっかりと確かめるように触れる医師の手が、お腹の上で動くのを目で追う。付き添ってくれているメリルと、そして寝椅子の背もたれにいる小さな精霊もじっと見つめていた。

静かに触診していた医師が、やがてお腹から手を離す。

「お腹の赤ちゃんは元気そうですね。逆さになってることもなさそうですし、順調そのものです」

にっこりと笑って告げられた言葉に、リサはホッとする。

「ありがとうございます」

「そういえば、精霊さんと赤ちゃんとの交流はその後どうですか？」

医師がリサの周りに視線を泳がせた。

待ってましたというように、緑色の精霊がふわりと飛び出して来る。

この精霊はバジル。リサと契約している、緑を「かま」と司る精霊だ。

不思議なことにバジルは、リサのお腹の赤ちゃんと意思疎通ができるのだ。といっても言葉ではなく、リサのお腹が光るのを見て赤ちゃんの気持ちを想像しているだけなので、高度なコミュニケーションは取れないようだが。

「赤ちゃん、とっても元気ですよ！ 最近はバジルからだけじゃなく、赤ちゃんの方から話しかけてくれることもあるんです！」

得意げに話すバジルの言葉をリサは医師に伝えた。

すると彼女はクスクスと笑って、「それはいいですね」と頷く。

「今くらいまで育つてくると、赤ちゃんにも外の声は聞こえているようですからね。たくさん話しかけてあげてください」

「バジル、お姉さんですから、もちろんたくさん話しかけますよ！」

以前、リサが『バジルちゃんはお姉さんだね』と言って以来、バジルは姉としての使命に燃えているらしい。よくリサのそばを離れてふらりと出かけていたのに、最近はリサのもとを離れようと

しない。

楽しそうだからいいかと、リサはその様子を見守っている。

「それでは本日はこれで」

「はい、ありがとうございます」

医師は妊娠後期に気を付けるべき事柄などを話すと、検診を終えて部屋を出ていく。

お腹の赤ちゃんが問題なく成長している様子に、リサはホッとしながら医師を見送った。

第四章 ヒントをもらいました。

「えっと、お茶の準備はできてるし、あとは……」

リサは朝からクロード家別館の応接室にいた。リサとジークが生活している別館にも本館ほど大きくはないが、応接室がある。

使う頻度は高くないけれど、クロード家の使用人がいつ使ってもいいように整えてくれている。

今日はその応接室に来客の予定があるのだ。

「リサ様、お客様がお見えになりました」

メリルがそう言つて客人を案内してきた。

「リサちゃん！」

嬉しそうな声と共に姿を見せたのは、シルバーブロンドの髪をお下げにした女の子。彼女はジークの妹のライラだ。

「いらつしゃい、ライラちゃん、お義母さん」

ライラのあとから入室してきた母のケイリーにも、リサは挨拶をする。

「久しぶりね、リサさん。お邪魔するわ」

ライラやジークと違い、ケイリーの髪は濃い緑色。しかし、涼しげで整った顔立ちと青い目はジークとそっくりだった。感情があまり表情に出ないジークとは対照的に、ケイリーは表情豊かだから印象はだいぶ違うけれど。

今日はケイリーとライラが遊びに来ることになっていたので、リサは朝から楽しみにしていたのだ。

「ジークが不在ですみません。カフェの方に行かなきゃいけないので……」

料理科はお休みなのだが、カフェの営業があるため、ジークは同席することができない。それをリサが謝ると、ケイリーは「気にしないで」と笑った。

「リサさんが働けない分、ジークにしつかり働いてもらった方がいいのよ。あの子がいてもあまり

「しゃべんないだろうし、今日は女性同士おしゃべりしましょ？」
自分の息子だからか、ケイリーはジークに対して遠慮がない。
「そうそう！ 私もリサちゃんといっぱいお話ししたいもん！」
ライラも同意したので、リサは思わず笑った。

二人にソファを勧めると、メリルがお茶を出してくれる。

「ジークから聞いたけど、ステイルベンルテアを聞くんですって？」

お茶で喉を潤してからケイリーが切り出した。

今日二人がここにいるのは、リサの様子を見に来てくれたからでもあるが、リサがステイルベンルテアのことをケイリーから聞きたいと思ったからでもある。

ジークからそのことを聞いたケイリーが、わざわざ訪問してくれたのだ。

「そうなんです。ただ私はステイルベンルテアに参加したことがないので、どういう会にすればいいのか迷ってます……お義母さんはどうしました？」

「そうねえ。マシューの時は初めてだったから、たくさん人を呼んだ記憶があるわ。私も友達もまだ若かったし、親たちやロドニーも協力してくれてね。放牧場を使ってガーデンパーティーにしたわ」

マシューとはジークの兄で、ロドニーとはジークの父のことである。

ジークの実家は、馬の卸売業を営んでいるため、王都の外に広い放牧場を持っているらしい。その放牧場でガーデンパーティーをしたということは、かなり大規模なステイルベンルテアだったよ
うだ。

「ねえ、ライラの時はどうだったの？」

一緒に話を聞いていたライラが、自分の時はどうだったのか気になったらしく、ケイリーにたずねる。

「ライラとジークの時は、本当に仲のいい友達だけにしたわね。家に呼んで、ちょっとしたお茶会みたいな感じで」

「えー……」

ケイリーの答えが不服なのか、ライラは残念そうな声を上げた。

「だってねえ、その頃には友達もみんな子供がいたし、お互いの都合もあるでしょう？ 子供が二人目、三人目ともなると、やっぱり最初ほど盛大にはできないわ。もちろん子供が生まれてくるのは何番目の子であっても嬉しいけれどね。ステイルベンルテアの規模が小さいからって、喜びが小さいわけじゃないから、そこは誤解しないでほしいわ。ジークができた時も、ライラができた時も、ものすっごく嬉しかったんだからね」

そうやって、ケイリーは隣に座るライラの頭を撫でる。

「そうなんだ」

ライラは納得したように呟いた。

スティルベンルテアがどのようなものであれ、子供の誕生を祝う気持ちは変わらないのだと、リサも納得できる。

「それで、リサさんは今のところ、どんなスティルベンルテアをしようと思ってるの？」

「上手くイメージできないので、招待したい人のリストから作りはじめたんですが、その人数がすごく多くなっちゃって……」

「あらいいじゃない。せっかくだし呼びたい人をいくらでも呼んだらいいわ。クロード家だし、場所には困らないと思うけど、なんならうちの放牧場を使ってもらってもいいし。……あ、でも今の時期は屋外だと寒いわね」

「ありがとうございます」

ケイリーの気持ちは嬉しくて、リサは微笑んでお礼を言った。すると、ライラが「ねえねえ、リサちゃん」と話しかけてくる。

「そのスティルベンルテア、ライラも参加できたりする？」

「もちろん！是非来てほしいな」

「……あ、でも来るのは大人ばかりなんでしょ……？ そしたら場違いかなあ」

ライラは少し考えてから、しゅんとした。

十一歳のライラは学院の初等科に通っている。リサの元の世界で言うところの小学校高学年だ。

出会った頃に比べたら大きくなったけれど、まだまだ子供。スティルベンルテアには参加してみたいが、子供一人で参加して楽しめるか不安になったのだろう。

大人のパーティーに興味があっても、子供が楽しめるのは最初のうちだけだったりする。子供にはまだ難しい話も多いだろうし、そんな中にいると飽きてくるものだ。

もしかしたらライラはそのような経験をすでにしているのかもしれない。

だがライラの反応から、リサはふと思いついた。

「子供でも楽しめるようなスティルベンルテアならいいかもしれないですね……」

「子供でも？」

リサの言葉にライラが顔を上げた。その目は期待するように輝いている。

「ライラちゃんの他にも同じくらいの子がいたら、一緒に遊んだりもできるかなって思ったんだけど……」

「あら、いいじゃない！子供がいる人でも参加しやすいっていうのは、スティルベンルテアにはぴったりな条件だと思うわ。子育ての話聞けたりもするし」

ケイリーがリサの考えを後押ししてくれた。

リサの身近な人でいえば、オリヴィアとデリアには子供がいる。二人には是非来てほしいと思っていたが、デリアはともかくオリヴィアはシングルマザーなので、息子のヴェルノを連れての参加になるだろう。

他に子供の参加者がいなければ、ヴェルノもライラが心配したのと同じような状況になってしまう。

もちろんヴェルノだけじゃなく、デリアの娘でヴェルノと仲良しのロレーナも呼ばいいのだが、それでも大人向けの会ではすぐに飽きてしまうだろう。

そういったことを考えると、ライラの言葉はリサにとって大きなヒントになったような気がした。大人も子供も楽しめるスタイルベンルテア。

それには、ただ子供が参加できるというだけではなく、彼らが飽きないような工夫が必要だし、かといって子供だけに焦点を当てるのもダメだろう。

ケイリーがマシユを身ごもった時に開いたというスタイルベンルテアは、放牧場でのガーデンパーティーだから、子供たちが自由に走り回れたかもしれない。

だが、今の季節は冬。

さつきケイリーが言った通り、さすがに寒いので屋外は難しい。

そうなる室内で大人も子供ももてなせるパーティーを考えないといけない。

漠然としていたスタイルベンルテアのイメージがはつきりすると共に、リサは自分がワクワクしてきたのを感じていた。

第五章 再考しました。

ケイリーは最後に『時間も余裕もある一人目の時には、自分がやりたいスタイルベンルテアを思いつきやるといいわ』と助言をしてから、ライラと共に帰っていった。

一人になったリサは、どんなスタイルベンルテアにしたいかを考え直すことにする。

「まず赤ちゃんを祝ってもらうことですよ」

それがスタイルベンルテアを開く根本的な理由だ。

しかし、わざわざ意識せずとも来てくれた人はみんな祝ってくれると思う。

「あとは私自身がどんな会にしたいかってことだよね」

ケイリーは『自分がやりたいスタイルベンルテアをやるといい』言っていた。

まだお腹の子が生まれてもいないのに、二人目や三人目の子供のことを考えるのはおかしいけれ

ど、もしも一人っ子になるのであれば、ステイルベンルテアを開くのはこれっきりとなる。ステイルベンルテアは出産するまでの間に何度開いてもいいと聞くが、時間や準備の手間を考えると、そう何度も開くことはできない。

それにケイリーがそうだったように、やはり子供が二人目、三人目になるにつれ、ステイルベンルテアも小規模になっていくだろう。

子供が生まれれば毎日やることも多いから、時間的な余裕もなくなる。それに、ごく親しい相手だとしても、ステイルベンルテアのために何度も時間を作ってもらうのは申し訳ない。

だからこそ、ケイリーもあの助言をしてくれたのだと思う。

経験者から背中を押されたリサは、思い切って自分がやりたいステイルベンルテアをしようと思つた。

そして真つ先に思い浮かんだのは――

「久しぶりに思いっきり料理がしたいかも」

お腹が大きくなつてきてからは、料理をする機会もめつきり減つてしまった。カフェと料理科で毎日のようにしていたけれど、その仕事も今はお休み中。

さらにクロード家には料理長がいるので、毎日の食事はリサが作らなくてもいい。特別な事情がなければ、料理をしなくても大丈夫な環境なのだ。

でもその一方で、料理はリサの趣味でもある。

この世界に来てカフェを開店できたのも、料理という長年の趣味が高じたからだとと言える。

そして料理はリサにとって好きなことであると同時に、ストレス発散の手段でもあったということに、リサは最近気付いた。

「みんなが楽しめる料理を振る舞えたらいいなあ。こう、気軽につまめて楽しい感じの……」

――赤ちゃんのお誕生日会ならぬ、お誕生日前会みたいな雰囲気にしたらどうだろう？

お誕生日会は大人も子供も大好きなはずだ。せっかくだし子供連れで来てもらって、大人にも一緒に楽しんでもらいたい。

リサはさっそく思いつくまま料理を書き出してみる。

「子供の誕生日パーティーの定番だと、エビフライ、ピザ、フライドポテトに、ちらし寿司、たこ焼き、お好み焼き……あ！ 唐揚げはチューリップにしよう！」

リサは自分が幼い頃のお誕生日会を思い出した。毎回、母がチューリップ唐揚げを作ってくれていた。

普通の唐揚げとは違い、手羽元や手羽先を使って作る。骨付きのままお肉を片側に寄せ、まるでチューリップのような形にして揚げたものだ。

骨の部分が持ち手になって食べやすい上に、外側の皮がパリッとしていておいしい。

作るのに少し手間がかかるので、お誕生日会のような特別な日にしか作ってもらえなかったが、だからこそ幼い頃のリサにとっては特別な食べ物だった。

「うん。見た目も楽しいし、いいかもしれない」

料理のことを考えはじめたら、あんなに思い悩んでいたスティルベンルテアがどんどん楽しみになってきた。

「マスターも赤ちゃんも楽しそうですね〜！」

生き生きとはじめたりサに、バジルがニコニコと笑いながら言った。

「赤ちゃんも楽しそうなの？」

「はい！ ピカピカしてますよ！」

どうやらお腹の子もリサの気持ちを感じ取っているようだ。ピカピカ光っているのが楽しいということなのかは定かでないが、バジルが嬉しそうに言うので、リサはそういうことにしておこうと思う。

「たくさん料理を出すなら立食形式かなあ。でも座って休憩できるように、壁際に椅子も置いて……」

ずっと立ちっぱなしだとリサ自身も大変なので、椅子の用意は必須だ。

あとは来てくれた子供たちが楽しめる場所にしたい。大人の集まりに子供が来ると、はじめはい

いけれどだんだん飽きてしまう。そうなった時に遊べるスペースを作っておいたらいいんじゃないかとリサは考えていた。

「何を置けばいいかな？ おもちゃとか？ でもヴェルノくんとかローナちゃんくらいの歳になると、おもちゃで遊ぶって感じでもないのかな……」

二人より年上のライラもいるので、それも考慮したい。

本やボードゲームみたいなものも用意しておこうと、リサはメモに書きつける。

「よし、あとはジークとシアさんと、ギルさんにも意見を聞いてまとめよう！」

改めてメモを見ると、料理のことが大半を占めている。だが、それはそれで自分らしいスティルベンルテアかもしれない、とリサは思うのだった。

その日の夕食後、リサはジークたちに時間を作ってもらって、スティルベンルテアのことを相談した。

「こんな感じでやろうと思ってるんですけど、どうですか？」

今日考えたことを説明して、三人の反応を窺う。

「リサが決めたことならそれでいいと思う。料理でどうにかしようとするのは相変わらずだな、とは感じたが……」